

ほっかいどう

# がいはつグラフ

北海道開発局広報誌

Vol.40

2004 季刊



北海道開発グラフ

通巻第四十号

二〇〇四年(平成十六年)十一月

監修

北海道開発局広報室

発行 財団法人北海道開発協会

〒001-0001 札幌市北区北11条西2丁目 セントラル札幌ビル  
☎011-709-5111 FAX 011-709-5115

開発の日々の  
ひとコマ



## 天塩川治水頭彰碑

明治30年代に開拓が始まったばかりの中川町(当時は村)には、天塩川が奔放に蛇行を繰り返す原野が広がっていました。毎年のように続く水害に、農作物や家屋は被害を受け、住民たちは悩まされました。被害を軽減する河川改修は、地元の切なる願いで、住民たちと村は関係機関に対して積極的にその実施を働きかけました。

悲願が実り、昭和15年、中川町では初めてのショートカット工事が始まりました。第二次世界大戦の影響で、その通水までには十年以上が経過しましたが、以後も蛇行箇所ショートカット工事が次々に進められ、水害の心配は年々解消されていきました。

中川町開基70周年となった昭和49年、大富地区の天塩川左岸に、治水頭彰碑が建立されました。碑文には、町の基礎を築いた数々の治水事業への深い感銘と開拓当時の先人たちへの感謝の気持ちが記されています。

## タンチョウと冬の釧路湿原

タンチョウは、日本では釧路湿原をはじめとする北海道東部に生息する鳥で、特別天然記念物に指定されています。一年を通して見ることができ、大地が雪に覆われる冬の姿は特に美しく、たくさんの写真愛好家を魅了しています。

タンチョウをはじめ希少な動植物が生息する釧路湿原を保全・再生するため、現在、住民やNPO、行政などの多様な主体で構成される自然再生協議会が開催され、具体的な施策について検討を進めています。

## 開発カレンダー 2005年1月～3月

( )内は開催地

- 1月25日 樽前山フォーラム 2004 (苫小牧市 苫小牧市文化会館)
- 2月3日～5日 2005 ふゆトピア・フェア in 旭川 (旭川市 道北地域旭川地場産業振興センターほか) ※19ページ参照
- 2月7日 北方領土の日
- 2月23日～24日 第48回北海道開発局技術研究発表会 (札幌市 札幌コンベンションセンター)
- 2月25日 「わが村は美しく-北海道」運動第2回コンクール表彰授与式・交流発表会 (札幌市(予定))

## 特集・石狩鍋を食べるまで —旅人と食材との出会い—

事業紹介／冬の峠の安全走行に  
「冬の峠案内」をご利用ください

ついでと最前線／「てっぺんドーム」完成で、  
より親しまれる宗谷港に

開発事業のあゆみ／天塩川ショートカットのあゆみ

ピックアップ／台風18号の被害復旧に向けて着々と  
地域の魅力を高める活動を認定

ちょっとひととき…道の駅／道南の道の駅

北国賦／風を見たかい  
～カイトフォトグラファー～ 林 範明さん



「北海道開発グラフ」はエコマーク認定の再生紙を使用しています。



# 石

## 狩鍋を食べるまで

旅人と食材との出会い

石狩鍋は、サケをはじめとして、こんぶ、だいこん、じゃがいも、たまねぎなど、北の海や豊かな大地で育まれた北海道産の食材をふんだんに使った鍋料理です。

北海道の代表的な郷土料理の一つですが、北海道以外の人にとっては、観光などで訪れて初めて口にすることが多いのではないのでしょうか。

今回の特集では、北海道を訪れた観光客が石狩鍋に出会うまでの過程と、食材が土鍋に集まって石狩鍋になるまでの過程を追いながら、北海道開発局の仕事がそれぞれにどのように関わっているのかを見ていきます。



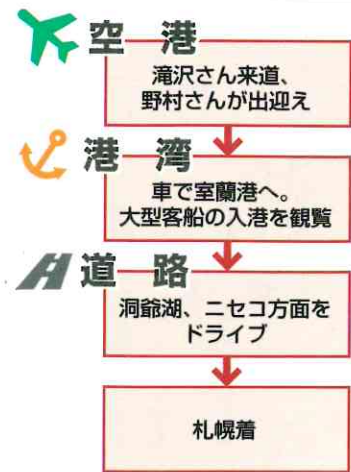
### 石狩鍋に出会うまで

東京在住の滝沢さんの趣味は旅行です。中でも特に楽しみにしているのが、その地域ならではの料理を堪能すること。

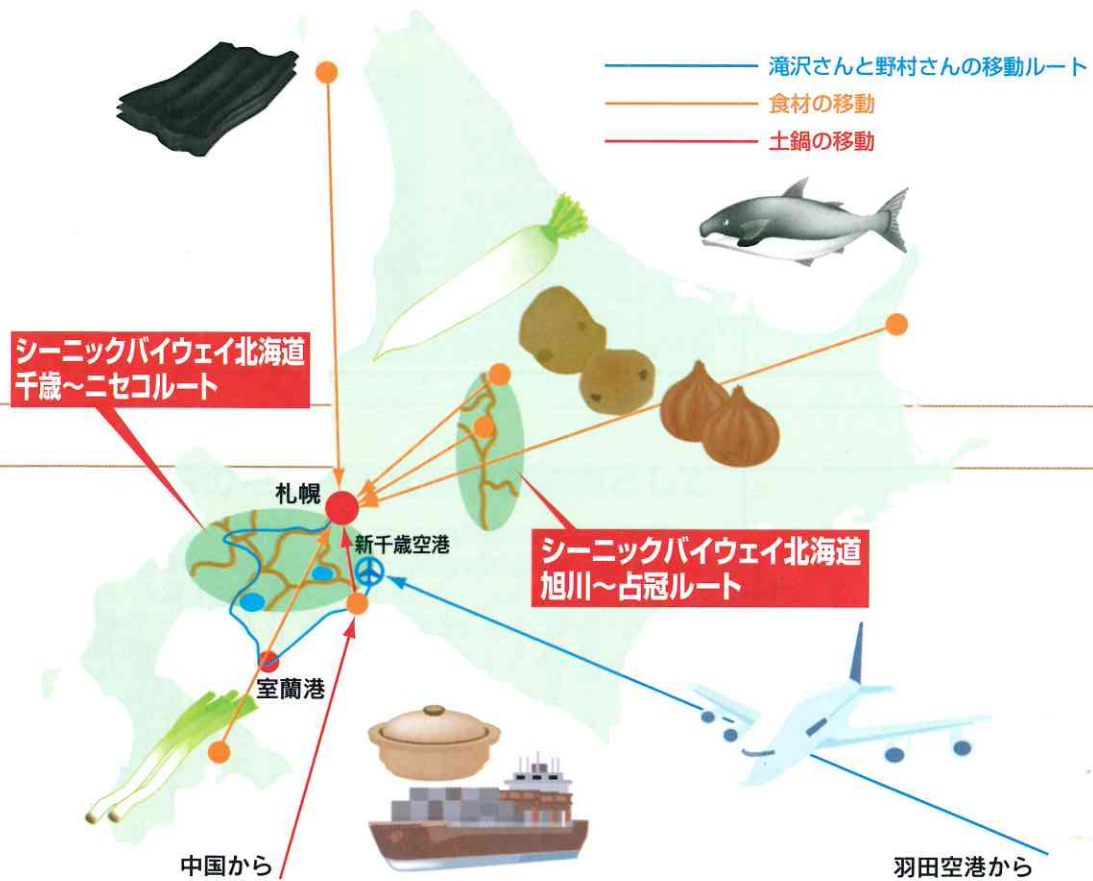
今回は北海道を観光して、本場の石狩鍋を食べる計画を立てました。案内役として真っ先に頭に浮かんだのが、滝沢さんの学生時代の同級生で、現在、札幌市在住の野村さん。北海道開発局に勤務しています。

早速連絡をとると、「僕でよかったですら喜んで案内するよ。夕食はうちで石狩鍋を食べよう。北海道の選りすぐりの食材を用意するから楽しみにしてくれよ」と快く引き受けてくれました。

こうして滝沢さんの石狩鍋に出会う旅が始まったのです。



スタート



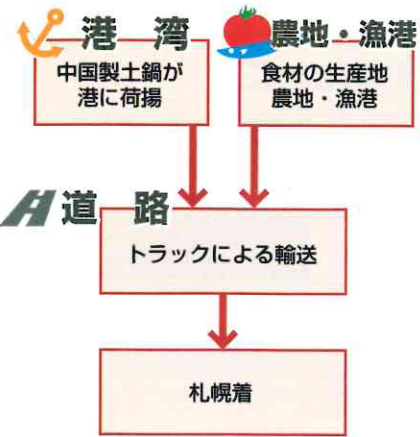
### 石狩鍋ができるまで

滝沢さんからの連絡を受け、野村さんは札幌のとある食材市場で働く知人に電話。

「東京から来る友人に石狩鍋をご馳走するんだ。当日買いに行くから食材の仕入れをお願いできるかな。サケも野菜も産地にこだわりたいから、サケは羅臼で揚がったあきあじ、じゃがいもは美瑛産、こんぶは利尻産、たまねぎは…」と注文。「あと…土鍋も、大きめのものを買っておこう」と近所のホームセンターへ。

ところが、欲しい大きさの中国製土鍋が品切れ中。一週間程で入荷するということなので、入ったら連絡をもらうことにしました。

こうして、石狩鍋の食材と土鍋が札幌に集まる旅が始まったのです。



スタート



航空機で新千歳空港に到着

新千歳空港に降り立った滝沢さんを野村さんがロビーで出迎えます。久しぶりの再会を懐かしみ、二人の気分は一気に学生時代へタイムスリップ。

「それにしても羽田―新千歳便は満席でびっくりしたよ。あんなに便数が多いのになあ」と滝沢さん。「羽田―新千歳便は、世界で最も多くの人が利用する区間だから、早めのチケット予約をおすすめしたんだよ」。

「何とかこの便に乗ることができて助かったよ。ありがたう。ところで、この空港には海外からの観光客が多いよだね。さつき韓国語や中国語らしき言葉を話す一行を見かけたけど」。

「北海道観光は国内で人気だけど、最近アジアでもブームになっているんだ。その影響で、台湾や韓国からのチャーター便も増えつつあるんだよ。まあ、立ち話もなんだから、早いところ僕らの車で出発しようよ。まずは室蘭港へ案内するよ」。



利用しやすい空港にするために

北海道の空港は、増加する海外との交流のための玄関口として、また、道内外及び道内の交通の拠点として重要な役割を担っています。空港整備は、航空機が安全に運航できること、そして利用者にとって使いやすいことなどを目指して行われてきました。

北海道開発局では、道内13空港のうち新千歳をはじめ丘珠、函館、釧路、稚内の5つの空港において、航空機が安全に運航できるよう滑走路等の整備、駐車場における身障者のための屋根付き駐車スペースなどバリアフリー化のための施設整備、積雪寒冷地対策などに取り組んでいます。



新千歳空港

●新千歳空港

大型客船入港を見学室蘭港へ

フロントガラスに現れる景色を次々と後ろへ飛ばしながら、高速道路を軽快に走ります。「室蘭は大きな港まちらしいけど、港で何かあるの？」と助手席の滝沢さん。

「ちょうど今日は、大型旅客船「飛鳥」の入港日なんだ。世界中を旅する豪華客船の入港なんて、年に数回しか見られないからね」。

室蘭港に到着すると、その「飛鳥」が白鳥大橋の下をくぐって港に入ってくるという、まさに絶妙のタイミング。ふ頭にはすでに大勢の観光客が訪れ、歓迎ムードです。

「こんなに大きな豪華客船を間近で見られて、感激だね。観光客もずいぶん多いなあ。港って、こうしてみるといい観光スポットだね」。

「そうだね。港って、周りを海に囲まれた北海道では身近な場所なんだ。船や夜景を見に行ったり、港まつりに参加したり。観光や交流の舞台になっているんだ」。

潮風に吹かれた後は、洞爺湖方面へ出発です。



白鳥大橋の下を通過する大型旅客船。室蘭港をはじめ北海道の各地の港には、毎年多くの大型客船が訪れています

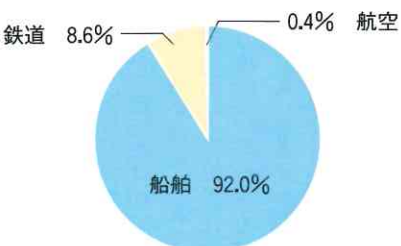
観光や交流の舞台として、憩いの場として

大型旅客船の寄港や、流氷観光船の運航、港まつりの開催など、港は観光や人々の交流の舞台になっています。また、海浜公園や緑地など、市民が集い、気軽に海とふれあうことができる場所もあります。

北海道開発局では、旅客船が安全に係留できるように旅客船ふ頭の整備や観光客や市民が憩い、楽しむことができる、賑わいのあるみなとづくりを進めています。

毎日の生活を支える物流拠点として

北海道―本州間輸送機関別分担率



資料：平成15年版 「数字でみる北海道の運輸」

まわりを海に囲まれた北海道では、港は地域の物流拠点として重要な役割を担っています。食料品をはじめとする生活必需品や産業活動に必要な燃料、飼料などの様々な貨物が日々港を出入りしています。

道内外の貨物の輸送は、北海道と海外との間ではほとんどすべてが、また本州との間でも90%以上が、船で行われています。

港湾

中国製の土鍋は港から

鍋料理に欠かせない土鍋は、国内産では三重県の萬古焼が有名ですが、最近はいろんなお店で値段が手頃な中国製のものをよく見かけます。

このような中国製の土鍋は、コンテナ船で日本各地の港へ運ばれ、

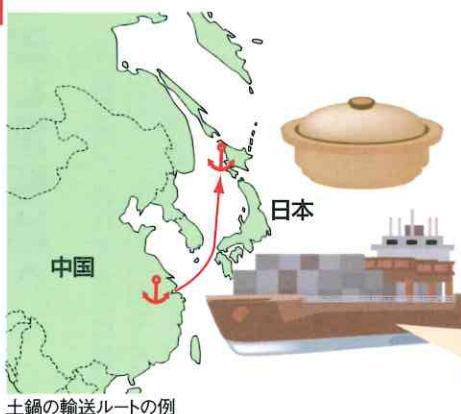
そこから様々な地域の販売店へ送られます。もちろん、北海道最大の貨物取扱量を誇る苫小牧港にも、土鍋を積んだコンテナ船がやってきています。

実は、土鍋はコンテナ船が運ぶ貨物のほんの一部で、ほかにも家具、自転車、衣料品など、生活と関わりのある様々なものが中国から北海道に運ばれています。それらの中には、土鍋以外にも石狩鍋と関係のあるものがあるかもしれません。



コンテナ貨物の積みおろし（苫小牧港）

土鍋は貨物のほんの一部。ほかにも、家具、自転車、衣料品などが中国から北海道に運ばれています。



土鍋の輸送ルートの例

農地・漁港

鮮度と質と豊かさが魅力の北海道の食材はここから

北海道は、全国の農地の約4分の1が集中しています。その面積は120万ヘクタール。秋田県の面積とほぼ同じです。また、北海道周辺海域は、全国の約4分の1の量の水産物が水揚げされる豊かな漁場にめぐまれています。

道内各地の農地や漁港からは、北海道が全国に誇る豊富な量と種類の食材が、日々供給されています。石狩鍋の材料となる農水産物の都道府県別生産量をみると、さけ、ます、こんぶ、だいこん、じゃがいも、たまねぎなどが全国で1位、ねぎ、はくさいが4位となっています。

もちろん、これらの食材は北海道で消費されるばかりではなく、ほかの都府県や海外にも運ばれています。



食料基地としての役割を強化するために

北海道で生産される食料は、カロリーベースで全国の1/5にもなります。これからも安全・安心な食料を供給する基地としての役割を果たしていくことが期待されます。

北海道開発局では、農家や漁業経営者が質の高い農水産物を安定して生産・供給できるように、農業用排水路施設やつくり育てる漁業を支える漁港施設の整備などに取り組んでいます。

(右) 羅臼漁港全天候型ふ頭の完成イメージ。より安全・安心な水産物の供給を支えるため、屋根付きの岸壁や低温で清浄な外海水を導入する施設などの整備を進めています



(左) 国営かんがい排水事業はまなか地区の配水調整池。生産性向上と環境負荷の軽減を両立させるため、農業用排水路や家畜ふん尿のリサイクル施設などの整備を進めています





景観を楽しみながらドライブ

「この洞爺湖、羊蹄山周辺エリアは、山や湖に温泉と、道内有数のリゾート地のひとつなんだ」。「さすが北海道、っていう広々とした景色が続くよね。自然も豊かで道幅も広くて気持ちがいいね」とリラックスした雰囲気の花壇さん。途中立ち寄ったニセコ周辺市街地では「空港周辺や洞爺湖温泉市街地でも感じたけど、道路脇に色とりどりの花が植えられていてとてもきれいだ」と、滝沢さんは花壇の花に目を止めたようです。

「これらの花は、地域の団体が植えていて、千歳からニセコ周辺にかけてはその活動が盛んなんだよ。花を植えたりする活動や観光案内のボランティアなどを行って、地域の魅力を発信している。これは、「シーニックバイウェイ北海道」といって、道路を活用した観光や地域づくりという意味合いの取組で、行政もその活動を支援しているんだよ」。「住んでいる人たちの地域への愛着を感じる活動だね」。「そろそろ札幌へ向かおう。美しい高原のワインディングロードを抜けていこうか」。



沿道での花の植栽の様子

シーニックバイウェイ北海道

北海道の道路は、ドライブ観光に大きな役割を果たしています。「シーニックバイウェイ北海道」は、それぞれ地域の美しい景色や個性を道でつなぎ、ルート全体の魅力を高めようとする取組です。現在、ニセコ～千歳間と旭川～占冠間の二つのモデルルートで、計38団体が沿道での花の植栽や、道路景観の点検、観光メニューの開発などを行っています。北海道開発局も、看板の統一・ルール化やルートキャンペーンなどを通じて、これらの活動を支援しています。

道路

きめ細かい道路網を經由し消費地へ

石狩鍋の食材と土鍋が出そろいました。あとはこれらが札幌市の市場や小売店に運ばれ、野村さんの手に渡るのを待つのみです。北海道内の貨物輸送は、トラックなどの車両によるものがほとんどです。

貨物車両が通行するのは道路。国土の約4分の1の面積を占める広大な北海道では、約6,400kmもの国道をはじめ道道や市町村道などの道路が、生産地と消費地をきめ細やかにつないでいます。もちろん、石狩鍋の食材も、道路を經由して札幌市へ運ばれてきました。

高規格幹線道路の整備

北海道内の移動・輸送は、人流、物流とも90%以上が自動車によるもの。道路は、ドライブ観光以外にも、仕事での移動や食品・製品の輸送なども密接に結びついています。北海道開発局では、国土の22%を占める広大な土地を、より迅速、安全、快適に移動することができるように、早期の高速交通ネットワークの形成に向けて、高規格幹線道路の整備を進めています。



高規格幹線道路（帯広広尾自動車道 帯広川西道路）を走行するトラックや乗用車。ヒート（砂糖の原料となる農作物）輸送繁忙の様子です

北海道の旬の味覚を満喫

札幌市内の野村さんの自宅に二人の姿があります。

「脂がのったサケに、じゃがいも、たまねぎなどの旬の野菜。北海道の新鮮な食材がこの鍋に大集合だね」と滝沢さん。

「ルーツは、漁師たちの浜料理らしいけど、全国でも土地の地名の付いている鍋は珍しいんじゃない?」「でっさいえ、そっだね。北海道を丸ごと味わっているようなぜいたくな気分だよ」

おいしい石狩鍋を囲んで、旧交を暖める楽しい時間が過ぎてゆきます。



このようにして、道外から訪れた旅行者が「観光」を楽しみ、北海道の「おいしい」に出会うまでを紹介しました。目には見えませんが、各食材に注がれた生産者の思いもいっしょに運ばれて、鍋の中でいっそう味わいが増しているようです。北海道開発局が整備している道路・港湾・空港・漁港・農業基盤等の社会資本は、北海道の観光と農水産物の生産から流通までを陰から支えています。北海道開発局ではこれからも、「安全でおいしい」を支える基盤整備、地域の人にも観光客にも魅力的な環境づくりを総合的に進めていきます。



# 道の駅

## 道南エリアの道の駅

今回紹介する森町と大成町の道の駅をはじめ、道南地方には個性あふれる10カ所の道の駅があります。その土地でしか出会えない食べ物や文化、道路情報など、いつも旬の情報を発信している道の駅を大いに利用して、冬のドライブも安全運転で楽しんでください。



## YOU・遊・もり

【国道5号 森町】

名物の「いかめし」、春は桜。秀峰・駒ヶ岳を望む憩いの場所



地域限定の農水産加工品が多彩に並び物産館内。手頃な値段で手が伸びる

内浦湾に面し、駒ヶ岳の裾野に広がる森町は、函館から車で約1時間の距離にある水産業と農業が主体のまち。道の駅は、市街地の国道5号沿いにあり、すぐ近くの鷺の木は、戊辰の役の際、榎本武揚はじめ新撰組副長の土方歳三ら幕軍三千余名が上陸した史跡の地でもあります。駅周辺には桜の名所で知られるオニウシ公園や青葉ヶ丘公園などが広がり、四季折々に美しい景観が楽しめる絶好の休憩ポイントです。

物産館には、特産品の「いかめし」やホタテ、イカ、タコなどの水産加工品をはじめ、日本有数の生産量を誇るみやこカボチャを素材にした焼酎やお菓子、プルーージュースなどの地場製品が並んでいます。物産館の職員によると、一番人気はやはり駅弁で有名な「いかめし」で、昆布の粉末の入った「昆布もなか」もおすすめだとか。「ここ森町からは、二つの山頂を持つ駒ヶ岳の見事なシルエットが見られるんですよ。ぜひ立ち寄りてゆっくり眺めてみたい。」

☎01374-2-4886



物産館横の通路でクルクル回しながら生干し販売している季節の魚

【北海道 道の駅スタンプラリー2004】は大盛況のうち終了しました。

ただし、全駅完全制覇へのチャレンジは2005年3月31日まで、2年間で全駅完全制覇をめざせる複数年ラリーへのチャレンジは2006年3月31日までです。

81(台風18号の影響で現在閉館中の「オスコイ!かもえない」を除く)または82以上の「道の駅」スタンプを集めた人には、もちろん

「完全制覇認定証」及び「全駅完全制覇ステッカー」がもらえますので、引き続きラリーを楽しんでください。

詳細は、北海道開発局のホームページからもご覧いただけます。 [http://www.hkd.mlit.go.jp/zigyoka/z\\_doro/station/index.html](http://www.hkd.mlit.go.jp/zigyoka/z_doro/station/index.html)

## てっくいランド大成

【国道229号 大成町】

海岸線をドライブ、夏は海水浴。川のほとりの露天風呂で寛ぐのもいい



「何でも気軽に尋ねてくださいね」と案内人。駅で町内宿泊施設の予約もできる

「親子熊岩」「マンモス岩」「タヌキ岩」など、動物の名のつく奇岩と青い海のコントラストを楽しみながらドライブできる国道229号沿いにある道の駅。マスコットキャラクターの「てっくい(ひらめ)」がかわいらしく出迎えてくれます。この駅の自慢は地元に住む観光案内人が常駐していること。大成の見どころや宿泊施設、近隣市町村のドライブ情報などを丁寧に教えてくれるのでとても頼りになります。案内人おすすめのお土産

は、するめいかの塩辛やタコの足にチーズを入れた薫製、アワビを型どった「あわび最中」など。「タコの頭の薫製も珍しいですよ」とのこと。土産品は道の駅では取り扱っていないが、近くの商店や駅から車で5分ほどの「国民宿舎あわび山荘」で揃うとか。「夏は海水浴、冬のドライブも静かです。よ。これからの季節はやっぱり温泉。国民宿舎の貝取瀧温泉のお湯は、からだの芯からあたたまりますよ」と案内人。天気の良い日には駅から奥尻島も望めるそうです。

☎01398-4-6561



貝取瀧川のほとりにある国民宿舎あわび山荘の露天風呂。日帰り入浴可。レストランのアワビ料理もおいしい



稚内港湾事務所

# しごとと 最・前・線

開発局と地域を結び、主役はまさに“ひと”。地域の人々と一緒に考え、行動する。その最前線に立つ姿を紹介します。

## 「てっぺんドーム」完成で、より親しまれる宗谷港に

稚内開発建設部 稚内港湾事務所

第1工事課 建設係 長谷川 恵一

観光名所として知られる宗谷岬まで歩いて約5分。日本最北の港・宗谷港は、周辺海域で豊富に獲れるホタテ、タコ等の水揚げ基地として重要な役割を担っています



てっぺんドーム2階は、サハリンの島影や宗谷海峡を一望できる展望デッキです(冬期間閉鎖。4月から開放再開予定)

私も現職に就いた平成14年、てっぺんドームは土台が完成した状態で、私はそれを引き継いで上のドーム部分の工事を担当しました。ドーム部分の工事は、一般の建築物をつくるのと似ていて、これまで経験してきた岸壁などの港湾構造物とは異なる部分が多く、施工管理に大変苦労しましたが、その分勉強にもなりま

した。港周辺の道路は、観光シーズンは多くの車両が通行する上、地元小学生の通学路にもなっています。この選別作業はすべて人の手で行われるんです。私たちは机上での仕事が多いので、このような漁業の現場を知る経験は貴重です。漁業者の立場に立った使いやすいつくづくりのための参考にしていきたいです。来月9月には大型クルーズ船「飛鳥」が宗谷港へ初入港します。暖かくなったら、ぜひ宗谷港へ遊びに来てください。天気の良い日には展望デッキからサハリンが望めると思いますよ。

宗谷港は、ホタテ漁やタコ漁を中心とした水産業が盛んですが、荷揚げをする岸壁が不足していることから、漁業者の就労環境改善のための施設整備を平成10年頃から進めてきています。このたび完成した「てっぺんドーム」はその一つで、1階部分は港周辺の強風を防いで高齢者にもやさしい漁業作業場、2階部分は展望デッキという二層構造の親水護岸です。本格的な使用は来年からですが、今まで野ざらしで行っていた港での作業が少しは楽になるので、水産物の安定供給につながればいいと思います。また、イベント会場などにも利用していただき、新しい観光拠点として多くの人に親しまれる場所になってほしいですね。

今年には宗谷漁業協同組合の協力で、ホタテ漁を体験しました。宗谷港周辺は、漁場に稚魚をまいて3、4年後に成魚を獲るホタテの地まき漁が有名です。漁船で20分ぐらいの沖に出て、船に揚げたホタテから、いいものだけを選別してカゴに入れる作業を手伝いました。この選別作業はすべて人の手で行われるんです。私たちは机上での仕事が多いので、このような漁業の現場を知る経験は貴重です。漁業者の立場に立った使いやすいつくづくりのための参考にしていきたいです。来月9月には大型クルーズ船「飛鳥」が宗谷港へ初入港します。暖かくなったら、ぜひ宗谷港へ遊びに来てください。天気の良い日には展望デッキからサハリンが望めると思いますよ。



平成16年7月18日の完成式典では、「てっぺんドーム」の命名者 相原舞子さん(稚内市立宗谷中学校)への表彰が行われました

事故がないように交通誘導員を配置したり、工事で出るほこりが漁に影響を及ぼさないように水をまいたりするなどの





12月23日祝から冬期開園した国営滝野すずらん丘陵公園には、冬の遊びがもりだくさん。雪の森歩きを楽しめるスノーシューのコース（2km）もあります。スノーシューは無料貸出なので、まずは気軽に体験してみませんか。



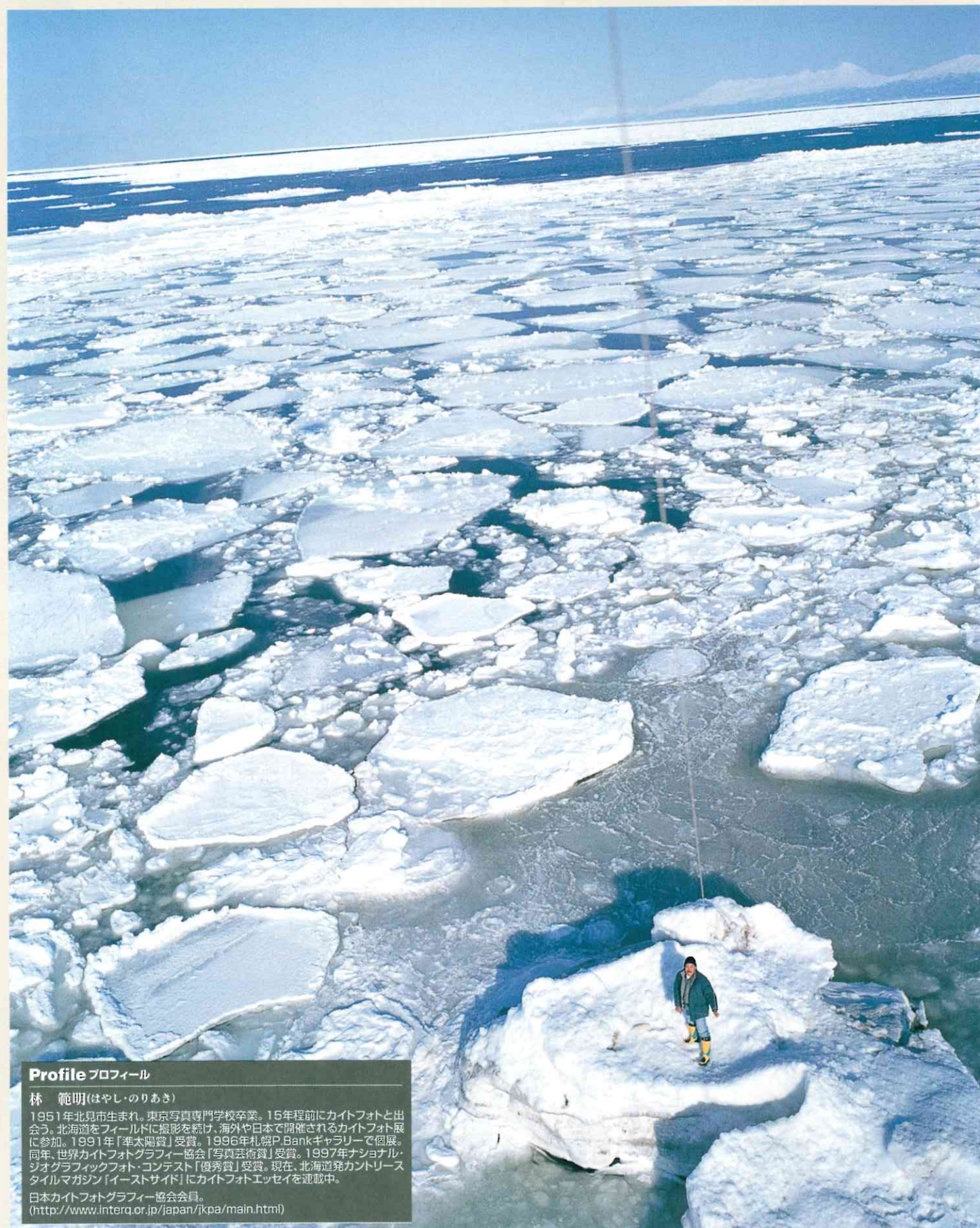
ぴーンと張りつめた冬の空気。静かな白い森。  
その奥に続いている小さな足跡をたどってみた。  
樹木の間も難なく歩ける魔法の靴で。  
フワフワの新雪もスノーシューならラクラク。  
雪原で感じる動物たちの息づかみや雪の不思議。  
雪の森歩きは、冬の世界の輝きを、  
ゆっくり流れる自然のリズムを、教えてくれるんだよ。

魔法の靴で雪山さんぽ









**Profile プロフィール**

林 範明 (はやし・のりあき)

1951年北見市生まれ。東京写真専門学校卒業。15年程前にカイトフォトと出会う。北海道をフィールドに撮影を続け、海外や日本で開催されるカイトフォト展に参加。1991年「準太陽賞」受賞。1996年札幌P.Bankギャラリーで個展。同年、世界カイトフォトグラフィー協会「写真芸術賞」受賞。1997年ナショナル・ジオグラフィックフォト・コンテスト「優秀賞」受賞。現在、北海道発カントリー・スタイルマガジン「イーストサイド」にカイトフォトエッセイを連載中。

日本カイトフォトグラフィー協会会員。  
<http://www.interq.or.jp/japan/jkpa/main.html>

オゾロワシになった気分での撮影したオホーツクの流氷。こんな間近で流氷を見ることができる地域は世界的にもあまりないだろう。撮影角度によって、地上の自分と風糸が写るのもカイトフォトの特徴。

Essay from hokkaido

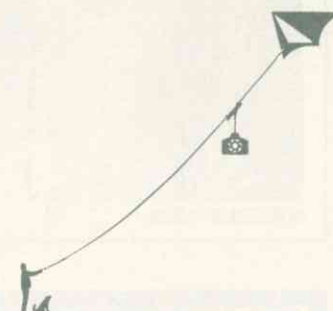


北国賦

風を見たかい

カイトフォトグラファー  
林 範明

Hayashi Noriaki



撮影には様々な風を使用するが、日本古来の六角風も大活躍。

鳥が地上を見下ろしているように、高いところから眺めてみたいと考えたことがあると思う。私たち人間は、きつと昔からそんな夢を抱き続けてきたのだろう。

風を使って空から写真を撮る方法がある。1888年にフランスのアルツール・バチューが風を使って撮影した写真が現存しており、それがカイト(風)フォトグラフィーの始まりといわれている。それから約120年後、今日では空撮という、飛行機・ヘリコプターに乗って撮影することを想像するが、費用や手続きなどがかなり過ぎるので、個人で気軽に行なうというわけにはいかない。その点でカイトフォトならばいつでも、どこでも一人で自由に撮影することが出来る。

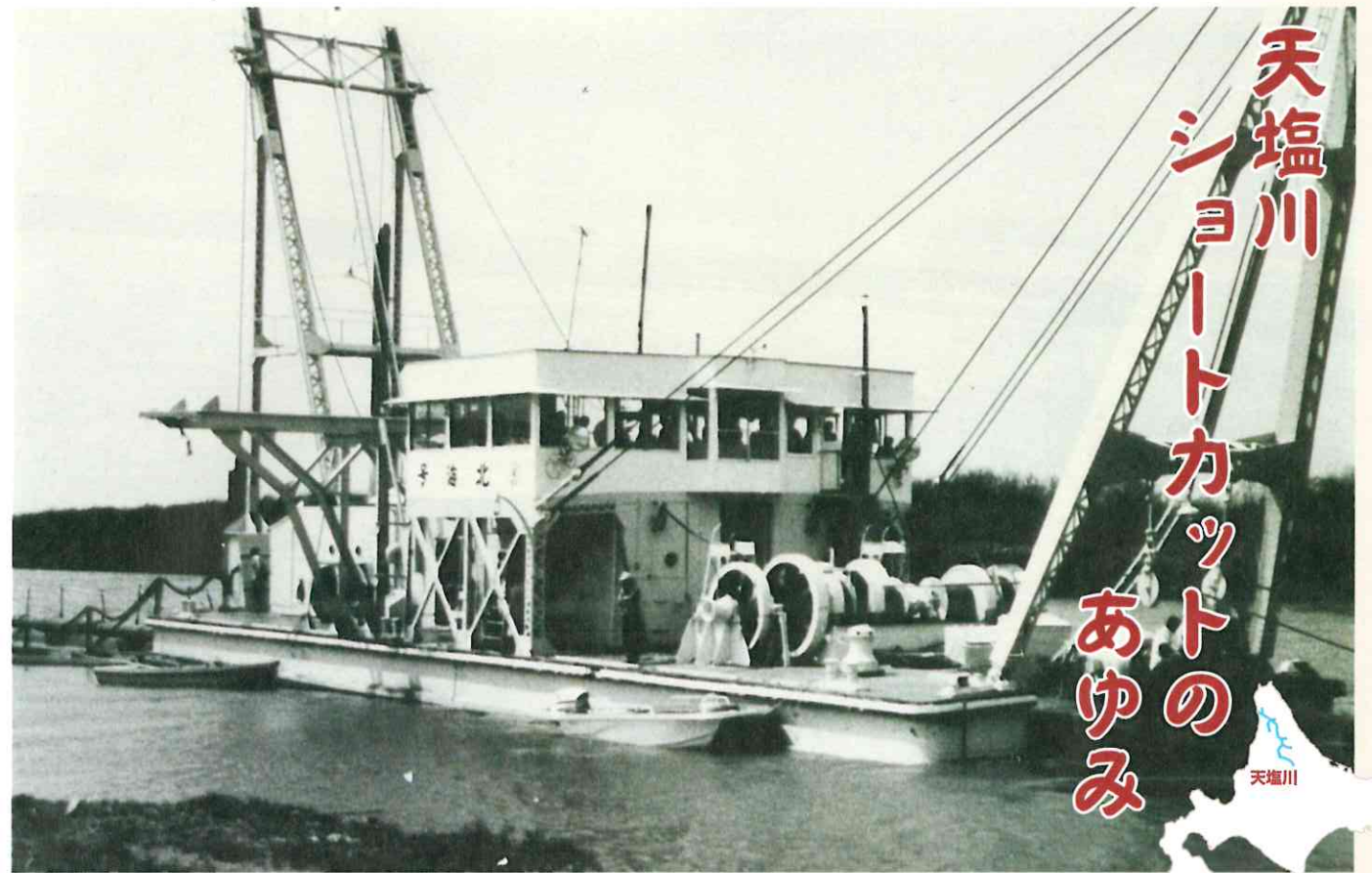
その方法はカメラを吊り上げることが可能な大きさの風(2m前後を20〜30mの高さまで揚げたのち、カメラを固定した金属の棒を風の揚げ糸に取り付ける。あとは風が上空に揚がる力を利用して、カメラを撮影に適した高度に保ち、無線機でシャッターを動作させる。カイト・フォトに適した撮影高度は、5〜200mの範囲で、ヘリコプターでも難しい低空での撮影が可能となる。

カイトフォトとの出会いは、15年程前に本屋でたまたま目にした一冊の本「カイトフォトグラフィー」(室岡克孝著・写真工業出版社)だ。著者に手紙を書き、東京へ出向いて指導して頂いたが、撮る技術や風揚げの方法などはほとんど独学。経験を積む中から修得したものが多い。始めると同時に、日本カイトフォトグラフィー協会(1986年設立)に入会。その時点で、北海道でカイトフォトをやっている人は一人もいなかった。今でも私を含め三人しか会員がいないので寂しいが、全国には約50人の会員がいて、それぞれの土地で撮影を続けている。

撮影の方法が特殊なのでとても難しいと考えられてしまっただろうか。やってみれば風揚げはとても楽しいし、超低空という新しい視点での写真が得られるのでやりがいがあると思っっている。ヨーロッパ、アメリカにも仲間がいて、それぞれカイトフォトグラフィー協会がある。定期的に各国に集まり、世界カイトフォトグラフィー協会としてシンポジウムを開催し、写真展等の活動を行っている。世界各地で撮影された風写真を見ていると想像をかきたてられて楽しい。

北海道という土地柄もあるけど、この地の風揚げはどこでも比較的自由に出来るし、季節もはつきりしているので、カイトフォトには最適の地と思う。これからも生まれて育ったこの土地で、新しく楽しい視点での写真を撮り続けていこうと思っっている。





ショートカット工事の浚渫作業に活躍する「北海号」

我が国の最北を流れる大河川 天塩川。源を北見山地に発し、名寄盆地を北上してサロベツ原野を流れ、やがて日本海に注ぎ込みます。全長は、全国第4位の256 kmにもなります。その流域のあちこちに、かつての川の蛇行の名残である三日月湖を見ることが出来ます。それらは、洪水のない安全で豊かな大地の実現を目指した、先人たちの大きな足跡なのです。

本格改修までの道のり

天塩川の洪水が社会問題として認識されるようになったのは、明治30年代の後半に入ってからでした。

天塩川は、その長さの割には急流で、春先は融雪により、夏期には集中豪雨により水かさが増し、しばしば洪水を引き起こしていました。流域で農地などの開発が進むにつれて人口も増加し、洪水による被害は年々大きくなっていきました。

そのころの治水工事は、舟運の障害となる流木の撤去や簡易な護岸工事を中心の、小規模で応急的な措置にすぎませんでした。

そのため、流域の住民は一刻も早い本格的な河川改修を期待しました。大正8年には流域初の治水計画が策定され、また同15年の第二期拓殖計画時に天塩川の治水事業が盛り込まれましたが、その実施には国の財政という大きな問題が立ち上がり、政府は予算不足を理由になかなか着工を認めませんでした。

昭和7年、夏期に2度の大きな洪水に見舞われました。水浸しになった流域の様子は、「あたかも大海原」と報道されたほどです。この年の流域の洪水被害額は、大正8年から12年にかけての5年間の年平均被害額37万8千円を大幅に上回る442万円を記録。甚大なものとなりました。



機械が普及する以前は、人力で土砂を掘り、馬にトロッコを引かせて運搬する方法で、工事が進められていました

東ウブシのショートカット

昭和26年に北海道開発局が発足。以降の天塩川の河川改修を担うようになりま

す。この洪水が契機となってようやく予算措置がなされ、昭和9年、当時の北海道庁は治水計画を修正するとともに、河川改修に着手しました。工事は、名寄周辺での河川蛇行部分のショートカット（※1）と堤防の建設が主でした。戦火が次第に拡大しつつあった中にも関わらず、昭和21年に第二期拓殖計画が終了するまでの間に、計画を上回る実績を残しました。

昭和27年からは、下流域で洪水被害の大きい地区の一つであった東ウブシ（幌延町）で、ショートカット工事を開始しました。

工事は、エキスカベーターと呼ばれる掘削機と機関車、積土運搬車を組み合わせて土砂を掘削・運搬するという、当時主流の機械施工で行われました。しかし、軟弱な泥炭地に機関車を走行させるのは

ただでさえ困難で、掘削が進むにつれて泥炭がむき出しになると、作業条件は一層悪化しました。さらに、洪水で現場が水浸しになると、復旧作業に何日も費やさなければなりません。

浚渫の雄「北海号」の活躍

この状況を打開し、1日でも早い通水を目指すため、昭和31年7月、エキスカベーターに代わってポンプ浚渫船「北海号」が投入されました。ポンプ浚渫船は、ポンプを使って河底や海底にたまった

土砂を吸い上げる（浚渫）といいますが土木作業船で、泥炭土の軟弱な足場に悩まされることがありません。

北海号の投入により、その後の掘削スピードは飛躍的に上がりました。そして、同年秋にはこの箇所（捷水路（※2））が通水となりました。北海号がこの短期間に浚渫した土砂の量19万m<sup>3</sup>は、エキスカベーターによる4年間の掘削量21万m<sup>3</sup>の約9割にもなります。

北海号は、東ウブシの掘削工事を終えた後も、下流域の各区間のショートカット工事に活躍しました。昭和54年にその役目を終えて廃船となりましたが、天塩川で稼働した23年間に、下流域では9か所の捷水路が通水し、川の長さは17 kmも短縮されました。浚渫した土砂の総量は、札幌ドーム約7・3個分（1、147万m<sup>3</sup>）にもなりました。

このように、先人たちの取組や北海号の活躍があつて、天塩川では昭和54年までに25か所の捷水路が通水。川の水位を下げ、水害の軽減に大きな効果を発揮しました。

北海道遺産として選定される

ショートカット工事が進む間に、流域の各地で堤防や樋門などの整備も進みました。かつて脅威をもたらした氾濫は次第にその頻度を減らし、治水の安全度は高まりつつあります。

今、その流れは、大地に豊かな実りをもたらすとともに、人々の日々の暮らしに潤いや活力を与えています。国内有数のカヌー適地として知られるようになり



天塩川水系流域図

(右) エキスカベーター、機関車、積土運搬車の組み合わせによる掘削工事。軟弱な泥炭土と度々襲う洪水に悩まされました

(下) ショートカット工事完成後の東ウブシ地区上空写真。三日月湖は、かつての天塩川の蛇行の名残です



ました。

り、豊かに残された自然の雄大な姿を水上から眺めようと、夏期には数多くのカヌー愛好者が川を下ります。平成16年10月22日、天塩川は北海道遺産の一つに選定されました。これからも、流域の発展に貢献した先人たちの思いを引き継ぎ、天塩川の豊かな恵みを活かした地域づくりが進められていくことでしょう。

※1 ショートカット

河川の蛇行部分を直線的につなげること。川の流れをよくして洪水を軽減させる効果があります

※2 捷水路

ショートカット工事により切り替えられた水路

参考文献 (一) は 編者

- 天塩川治水史
- (天塩川治水史編集委員会)
- 天塩川と名寄河川事務所のあゆみ
- (旭川開発建設部名寄河川事務所)
- 朝北の大河 天塩川
- (財団法人 北海道開発協会)



現在の天塩川は、日本有数のカヌー適地として有名です。毎年、日本最長のカヌーツーリング大会「ダウン・ザ・テッシーオーベツ」が開催されています



